

接続助詞による言いさし表現の階層化

— 「から」を例に—

金 瑋婷

The Stages of Sentences Ending with Conjunctive Particles:

Taking “kara” as an Example

JIN Weiting

要旨

本文旨在全面考察以接续助词结尾的句子，进一步分析这些句子的功能阶段性，并尝试运用动态性分析来揭示出接续助词功能转换的连续性。本文中，作者将以“から”为例进行介绍。

由于历来的先行研究缺乏动态性分析视角和体系化把握方法，导致研究无法阐明接续助词的功能转化和给予不完整句子用法的准确定位。作者为解决以上问题，在确立了区分完整句子和不完整句子的标准的基础上，将包含接续助词的句子分为了三个阶段：阶段 A 是指接续助词用于从属句的复句，接续助词的用法为其本来的用法；阶段 B 是指以接续助词结尾的句子，但因为对主句还有依存性，并且并没有出现对人的语气，所以依旧属于不完整句子，接续助词的用法也依旧是其本来的用法；阶段 C 也是接续助词用于结尾的句子，与 B 不同的是，此阶段中以表达对人的语气为主，其性质能够等同于完整句，接续助词的用法已经被终助词化。

以“から”结尾的句子中，首先有属于阶段 B 的句子，而阶段 B 又能被分为 B1 和 B2 两个阶段。B1 表达的是具有逻辑性的因果关系，B2 表达的是具有主观性的因果关系。而 B2 的主观性特征，使得“から”句能够脱离主句的束缚，从而被单独使用，产生新的语气，为向阶段 C 转化提供了可能性。阶段 C 中因表达的语气不同，也可被分为 C1 和 C2 两个阶段，他们都是等同于完整句的句子。其中“から”在 C1 中表达的是推动和催促的语气，在 C2 中表达的是陈述和感情的呼出的语气。由此以“から”结尾的句子经历了“A → B → C”的阶段性变化，而“から”的用法经历了“接续助词本来的用法 → 被终助词化的用法”的变化。

0. はじめに

接続助詞は本来語と語、節と節を接続する助詞¹であり（以下、このような用法を接続助詞の本来的用法と呼ぶ）、以下のように使用されるべきである。

- 1) 村井「(由貴に) おい、こいつ年いってっけどまだ坊やだだから、あんま色目使うんじゃねえよ」

(『日本で一番悪い奴ら』池上純哉)

- 2) 内海「あんまり金ないから、こんなんしか無理やけど、ほら瀬戸が集めてる三毛貝シリーズのガチャガチャ。スコ貝とシークレットだけ持ってないないんやろ？」

(『セトウツミ』宮崎大・大森立嗣)

しかし、話し言葉においては、接続助詞が発話の最後に現れて文がそれで終わる現象がしばしば見られる。例えば、

- 3) かずこ「……友達が悪いとどうにもなんねんだよ……」

千夏「……(身体を起こし、振り返った)」

かずこ「悪いのばっかどつきあって……」

(『そこのみにて光輝く』高田亮)

- 4) ミキ「この前、何かヘンなこと言っちゃって、ごめん」

楓「この前って？」

¹ 益岡・田窪(1992) 51ページを参照されたい。

ミキ「……健介のこと、甘えてるとか」

楓「(首を振る) 気にしてない……っていうか、ホント、甘えて
たんだと思うし」

(『こっばみじん』 西田直子)

といったような使い方である。

現代日本語では、このような言いかけてやめたりするような発話、構文的に接続助詞で話を途中で打ち切ってしまうような発話、つまり、言いさした形を取っていながら文が終わってしまう現象を「言いさし表現」²と呼ばれているようである。しかし、今までの研究では、多用されている接続助詞「から」「が／けど／けれど／けれども」「て」などを個別的に取り上げてそれらの言いさし表現の談話機能について分析を行うものが中心であった(白川：1991, 1996；永田：2001；横森：2011；朴：2008；石黒：2014など)。接続助詞による言いさし表現の全体を視野に入れて(国立国語研究所：1960；益岡・田窪：1992；高橋：1993；白川：2009, 2015など)、接続助詞用法から言いさし表現用法へといかに機能が変化していくのかという機能変化の連続性の視点から動的に捉える研究はあるもののまだ少ない、且つ不十分である(高橋：1993；于：2001；白川：2009など)。

従って、本研究は、このような言いさし表現について研究を行い、新たな動的視点を導入し、言いさし表現及び接続助詞の意味機能の連続性について解明していきたい³。

² 本研究では、接続助詞で終わる、形式上で不完全(統語的には主節を欠いた発話)の表現を総て「言いさし表現」と呼ぶことにする。言いさし表現における接続助詞の用法を言いさし用法と呼び、接続助詞としての本来の用法を本来の用法と呼ぶことにする。

1. 先行研究

話し言葉においては、接続助詞で終わる節が、主節を伴わずに単独で発話を構成する言いさし表現がしばしば観察される。このような言いさし表現はどのような特徴を持っているのか、また文法上でどのように位置づけるべきかについては、今まで多くの研究と説明が行われてきたが、接続助詞の全体を視野に入れてその位置づけを分析したものはまだ少ない。接続助詞による言いさし表現の全体を考慮している先行研究を三つの研究立場に分け、それぞれ代表的な先行研究として、益岡・田窪(1992)、国立国語研究所(1960)と高橋(1993)、白川(2009;2015)を挙げる。

1.1 省略説

接続助詞による言いさし表現を省略と位置づける先行研究について、代表的なものとして、益岡・田窪(1992)の研究を取り上げることがができる。益岡・田窪は、まず接続助詞は本来「語と語、節と節を接続する助詞」(益岡・田窪1992:51)とその働きを指摘したうえで、接続助詞で文が終わる用法、言い換えれば、接続助詞の言いさし用法を省略用法の一種と位置づけている。

従属節だけを述べれば、結論が推測できる場合、主節を省略することができ。自分が結論を出すより、相手に出させる方が丁寧になる

3 筆者は接続助詞による言いさし表現の全体を視野に入れて、言いさし表現の階層化及び各段階における接続助詞の機能とその連続性を中心に研究を行っている。本稿はその核心内容とされる言いさし表現の階層化について論じてみる。それに最も多用されている接続助詞「から」を例にし、その階層化の体系の下で、接続助詞はどのような機能連続性があるのかについて分析してみる。金(2018)でも、モダリティの角度から接続助詞による言いさし表現の分類を考察してみたが、本稿はそれを踏まえ、完全文と不完全文を区別する基準をはっきりさせた上で改めて段階別に言いさし表現を分類し、接続助詞の機能の連続性も考察してみる。

場合、結論を曖昧にしたい場合、結論部分が慣用的に決まっている場合、等に使われる。(p172)

そして、典型的な省略用法として次のような例を挙げている。

5) 田中ですけど(山田君いますか)。

6) 私はここにいますから(用があったら呼んでください)。

上の例で分かるように、益岡・田窪(1992)で接続助詞による言いさし表現が省略の一種と位置づけられている。実際の会話では文の形上括弧にある部分がないにもかかわらず、意味・機能的には省略された部分として一緒に理解されているからだということであろう。しかし、益岡・田窪の説明にはまだ不十分なところがあるように思う。

結論の推測はどのように行われ、どんな条件下で成り立つのか、そして、接続助詞はその推測の過程でどんな役割を果たしているのか、接続助詞のこのような機能は接続助詞の用法全体においてどのような位置づけを占めており、他の用法とどんな関係にあるのか、そのような特殊な用法は機能的にどのようなプロセスを経て変化してきているのか、なぜ主節を省略していたら、上述のような表現的效果が現れるのかといった問題は解明されていないと言える。

1.2 完全文説

接続助詞による言いさし表現を完全文と位置づける先行研究について、代表的なものとして、国立国語研究所(1960)と高橋(1993)の研究を挙げることができる。国立国語研究所(1960)と高橋(1993)は、前述した益岡・田窪の説とは違い、接続助詞による言いさし表現の完結性と

独自の用法に着目したものである。

まず、国立国語研究所（1960）は、接続助詞の終止的用法を「省略ではなくて、文を構成している」と判断し、その理由として、「陳述を負う述語が、すでにそこには存在するから」と「社会習慣としての終止のかたちを、話ことばでは、このへんまでひろげてよいものだと考えたため」（国立国語研究所1960：61-63）との二つを挙げている。

また、高橋（1993）は、接続助詞による言いさし表現が単なる「省略」ではなく、独立文の文末形式と同質性を持ち、固有の機能を持つと、「もともとの述語が省略された文であっても、文として成立していれば、その文は、のべかけかたを持っている」（高橋1993：19）というように指摘している。高橋（1993）には以下のような指摘もある。

「のべかけかたは、文の成立にどうしてもかかすことのできない条件のひとつである」（p19）

「こういう転成は、従属節の述語から、文の述語へという機能の変化の結果として生じたものであるという認識が必要である」（p22）

国立国語研究所と高橋によって代表される立場は、接続助詞による言いさし表現が完結性を有しているものと見なし、独立文としての独自の用法だと解釈したものである。言いさし表現の特殊性を論じたところは益岡・田窪の説より評価できると思うが、以下のような問題点があると考えられる。

国立国語研究所では、従属節と主節からなる複文全体や前後関係という文脈を元にして成り立つ聞き手の内容理解は、従属節だけで終わるそれとは同じかどうか、複文全体によって示される陳述は「陳述を負う従属節述語」によって示されるのか、また、「陳述を負う述語」が唯一

に文の機能を担うものであるのかといったことについて触れていない。

高橋の説では、接続助詞による言いさし表現における「のべかけかた」は、複文である本来の完全文における「のべかけかた」とどう違うか、そしてどのような関連性があり、陳述的に両者の間にどんな決定的な相違があるのか、ここで言う「のべかけかた」とは何なのか、どのようなプロセスを経て機能が変化しているのか、接続助詞はその過程でどのような役割を果たしているのか、複文にある本来の従属節とどのような関係があるのか、といったところに関してははっきりされていない。

1.3 従属節と完全文を統一した説

接続助詞による言いさし表現を完全文と認めた上、従属節との異質性及び独立文との並行性を論じ、その相違点と関連性を分析したのは白川（2009；2015）の説である。白川（2009）は、「対人的な態度を表す機能」と「対事的な態度を表す機能」という二つの面から、「文レベルでは不完全に見える従属節も、談話レベルでは、独立文と同等の機能を持っており、そのため、意味的な完結性を感じさせること、すなわち、従属節だけで言い終わっている感じを与えることがわかる」と説明し、「言いさし文」（白川は接続助詞による言いさし表現を狭義の「言いさし文」と呼んでいる）と独立文の平行性を分析している（白川2009：167-180）。そして、白川は「言いさし文」と「完全文」の従属節との異質性を説明するために、「主節が想定できない場合」「主節を想定すると主張がずれる場合」「主節を想定すると認識のあり方が変わる場合」という三つの場合を取り上げ、「省略」された主節を補って「言いさし文」を「完全文」に還元して説明しようとする、何らかの不都合が生じる」と、その異質性の特徴を指摘している（白川2009：180-186）。白川の説の要点をまとめると、下記のようなようになる。

「言いさし文」は、談話レベルにおいては、文内に談話的な要素（終助詞、接続詞、ノダなど）を持つ独立文と同等に位置づけることができる。

「言いさし文」は、談話レベルにおいては、「完全文」の従属節と異なった働きをする。(p186)

白川（2015）は白川（2009）での「言いさし文」に対する分類に基づき、白川（2009）の内容をまとめた上で、用例を用い、「主節はどこへ行ったか」という研究問題に答えながら、「言いさし文」の談話機能を分析している。白川（2015）は「言い尽くし」タイプの「言いさし文」の機能を「聞き手の認識に対して何らかの変更が必要とされる状況において、聞き手に持ちかけることによって、認識の変更を促す」（白川2015：6）とし、「関係づけ」タイプの「言いさし文」の機能を「従属節で表された事態が文脈上のほかの事態と関係づけられることによって、話し手の言いたいことが全うされる」（白川2015：8）としている。それを踏まえ、白川（2015）は「「言いさし文」は、けっして主節まで言わずに途中でやめてしまった不完全な文ではなく、完全な文と同じように、話し手の言いたいことを言い切っている」（白川2015：9）と述べ、終助詞との言い換えの角度から、「対人的モダリティ」と「対事的モダリティ」という二つの面から、「言いさし文」と独立文との平行性を論じている（白川2015：9-12）。

白川が言いさし表現の独立性に着目しながら、一方で完全文における従属節としての働きをも視野に入れて統一的に説明している点は他の説より評価できる。それは、白川は言いさし表現が特殊な表現形式ではなく、完全文における従属節や独立文と関連性があるという連続的な視点から考察したからである。しかし、完全文と見なす基準は何なのか、完

全文と見なすことができない言いさし表現もあるのか、独立文と平行性があるというのは、一人前の独立文として認められるということと同じなのかといった問題点はまだ不明確である。また、白川（2015）はモダリティの視点を導入し、独立文との平行性を述べているが、具体的にどのようにモダリティの角度から「言いさし文」の文法的位置づけを判断するのか、モダリティが完全文と不完全文を区別する際にどのような役割があるのかについてはあまり言及していない。更に、前で紹介した先行研究と同じように、接続助詞の機能は完全文の従属節につく場合と、独立文として働く場合との間に、どのような過程を経て機能が転換してきたのか、また接続助詞はその過程でどのような役割を果たしているのかについては明確な説明がされていない。

1.4 先行研究のまとめ

今まで、主な先行研究を紹介し、問題点を指摘してきた。まとめてみると、以下の不備などがある。

まず、接続助詞による言いさし表現を総て省略か完全文かのいずれに類別にさせて良いのか、その中間的なものはないのかについて疑問がある。接続助詞の本来の用法と言いさし表現用法との区別に役立つような決め手がうまく見つけ出せていない。

次に、完全文における従属節につく接続助詞と独立文としての言いさし文末につく接続助詞との間に現れる機能の連続性や相違点といったところはプロセス的にまだ明確に解明されていない。

最後に、本来は完全文における従属節につく接続助詞がなぜ文末に用いられるようになり、そして、なぜ文を終止させて独立文を作り出すことができるようになったのか、そのような接続助詞が文形成においてどのような役割を果たしているのかについてあまり言及されていない。

2. 研究目的

先行研究に基づき、先行研究にある不足点を解決するために、本研究の目的は以下の三つとなる。

まず、完全文と不完全文の区別に役立つ決め手を見つけ出す。それに基づき、言いさし表現を段階別に分け、そこに用いられる接続助詞の機能を明らかにする。

第二に、各段階で接続助詞はどのような機能を果たしているのかを分析する。

第三に、各段階の言いさし表現に用いられる接続助詞の機能の連続性を動的に捉え、機能転換のプロセスを明確にする。

これから、完全文と不完全文を区別する手立てから説明していく。

3. 文の成立について

日本語の文は構文的に、命題とモダリティという二つの部分で構成されるとされている。今までそれについて様々な説があるが、本研究では、仁田(1997)の説に従うことにする。仁田は文の構造には「言表事態」(命題)と「言表態度」(モダリティ)という二つの部分があると説明した上で、文の成立と構造について以下のように指摘している。

言表態度は、大きく《事態めあてのモダリティ》と《発話・伝達のモダリティ》の二種に分けられる。(p126)

(前略) 言表事態だけでは、単語連鎖は、文には成りえない。(p128)

単語連鎖は、言表態度総てを含むことによって、文として独立し、言表態度を振り落とすことによって、また、部分的に振り落とすことによって、振り落とした分だけ、文的度合を減じ、文の一部たる存在になる。(p186)

文の成立にとって言表態度の存在が必須である（後略）。(p186)

仁田の説に基づき、本研究は不完全文と完全文との区別は、言表態度の総てが含まれているかどうかというところにあるとする。従って、接続助詞は以下のような連続的用法が現れると見る。まず、不完全文に用いられる接続助詞と完全文に用いられる接続助詞というように大きく二つの場合に分けることができるとする。不完全文における接続助詞の用法は接続助詞の本来的用法である。しかし、その接続助詞が文中に現れる場合（接続助詞が現れる最も一般的な位置）もあれば、文末に現れる場合もある（倒置や省略の場合）。それに対し、完全文の文末に用いられる接続助詞の用法は終助詞化された用法である。そのような完全文には言表態度の総てが含まれている。

4. 言いさし表現の段階性

以上の文の認定基準に基づき、接続助詞を含む表現をAからCまで三つの段階に分けることができる。その中に、段階Aは従属節と主節から構成される完全な複文であり、接続助詞がつく部分は従属節として働く。文構造は【従属節（接続助詞も含め）、主節。】のようになっている。接続助詞の用法は本来的用法である。段階Aは完全な複文であり、言いさし表現ではないので、ここで説明することを省略する。例文1）と2）を参照されたい。

段階B以降は、接続助詞による言いさし表現である。形式上では、接続助詞の位置が文末に移動され、発話が接続助詞で終わる。段階Bの言いさし表現の構造は【(主節。) 従属節（接続助詞も含め）。】⁴になる。

4 「(主節。)」というのは、後続すべき主節は前置されたり、文脈上にあったりすることを指す。

段階Bの言いさし表現は言表事態のみ、あるいは言表事態と事態めあてのモダリティで構成されている。前述したように、言表事態と事態めあてのモダリティだけで完全文になれない。発話・伝達のモダリティが現れていないからである。

更に、段階Bの下位分類としてB1とB2という二種類が考えられる。段階B1は論理性を持つもので、段階B2は主観性を持つものである。段階B1は論理的な意味機能を表し、段階B2は主観的な意味機能を表すというように区別する。論理的意味機能というのは、倒置されたり、省略されたりした主節を復元すると、論理的に元の完全な複文に戻れる言いさし表現である。段階B1は最も元の複文に近いものである。段階B2となると、接続助詞は意味的にも構文的にも、本質的にまだ本来の用法と同じであるが、そこに含まれる主観性の特性から、その接続助詞が従属節と主節を結び付けるという複文における論理性の性質が弱体化される傾向が見られる。話し手が表現と伴って示す主観性というのは従属節が単独で使われる時に示す表現的特徴となり、接続助詞による言いさし表現が段階Cの言いさし文に転換する基盤となっているのである。

段階Cの言いさし文の構造は【従属節（接続助詞も含め）。】である。段階Cには、言表態度の総てが現れているため、完全文として認められる。従って、本研究では、段階Bと区別するために、段階Bの言いさし表現をまだ言いさし表現と呼び、段階Cの言いさし表現を言いさし文と呼ぶことにする。段階Cは、段階B2が築き上げている基礎を踏まえ、事態めあてのモダリティが弱体化され、発話・伝達のモダリティが強化され、完全文に転換してきている。発話・伝達のモダリティの種類によって、段階Cを更に段階C1と段階C2とに分けることができる。段階C1は、初めて発話・伝達のモダリティが現れる言いさし文である。主に働きかけや問いかけのモダリティを表す。そして、働きかけと問いかけの後続

内容が想定できる。しかし、段階Bとは違う。段階Bでは、後続内容を想定して補うと、言いさし表現にあるモダリティが変わらない。それは、モダリティを表すのが依存された主節だからである。それに対し、段階C1では、後続内容を想定して補うと、言いさし文にある働きかけや問いかけのモダリティがなくなる。それは、段階C1の言いさし文に発話・伝達のモダリティがそもそも存在するからである。段階C2は、後続内容が完全になくなった言いさし文である。主に述べ立てと表出のモダリティを表す。後続内容が想定できない言いさし文である。段階Cの言いさし文においては、接続助詞は発話・伝達のモダリティを表すようになり、接続助詞としての本来的機能を保ちながら、終助詞化された機能が主となる。

以上をもって、5では、「から」を例にし、具体的に「から」による言いさし表現はどのように上述の段階性を示しているのか、各段階で「から」はどのような役割を果たしているのか、更にどのような機能連続性があるのかについて述べていきたい。

5. 「から」による言いさし表現の段階性と「から」の機能連続性

段階Aは完全な複文であり、言いさし表現ではないので、本研究では段階Aに関する分析は展開しないことにする。

5.1 「から」による段階Bの言いさし表現

段階B以降は「から」で終わる言いさし表現である。まず段階Bを見てみる。段階Bの構造は【(主節。) 従属節 (接続助詞も含め)。】である。主節が倒置されたり、文脈上にあるため省略されたりし、従属節で終わる発話である。

先行研究では、白川は「から」の本来的用法には理由を表す「から」

と理由を表さない「から」との二種類があると指摘し、更に、「から」が本来の用法として因果関係を表すと判断できる基準について、「前文に対し、「どうして」で問うと、後文が答えになれる」（白川2009：38）と主張している。本小節では、言いさし表現における「から」の用法に現れる「どうして」の答えになれるかどうかの相違は、原因と結果を関係付ける論理性の仕方によるものだと主張する。つまり、論理的な因果関係付けは「どうして」の答えになれるもので、話し手の主観的因果関係付けは「どうして」の答えになれないのである。段階Bの下分類として、論理性を持つ段階B1と主観性を持つ段階B2がある。次に、「どうして」の答えになれる論理的因果関係（段階B1）と「どうして」の答えになれない主観的因果関係（段階B2）とに分けて説明していく。

（1）段階B1の言いさし表現—論理的因果関係を表す「から」

論理的因果関係を表す「から」による言いさし表現にはまず主節が倒置された例文がある。

7) 拓児「日雇いなんかやってらんねえよな、動きもしねえ連中の方が俺らよりいい給料もらってんだから」

（『そのみにて光輝く』高田亮）

8) 柏木「さあ、それは名簿を見んと分かんんです。うちは男女合わせて千六百人の会員さん、抱えてますから」

（『後妻業の女』鶴橋康夫）

以上の二つの例文は、それぞれ「動きもしねえ連中の方が俺らよりいい給料もらってんだから、日雇いなんかやってらんねえよな」「うちは

男女合わせて千六百人の会員さん、抱えていますから、名簿を見んと分
からんです」のように、前件と後件の位置を交換するだけで「理由→結
論」の完全文に復元できる。言表事態と理由を断定する事態めあてのモ
ダリティが含まれているため、段階Bの言いさし表現と見てよいであろ
う。前文に対し、「どうして」で問うと、後文が答えになれる。例えば、

7) A 「日雇いなんかやってらんねえよな」

B 「どうして」

A 「動きもしねえ連中の方が俺らよりいい給料もらってたから」

8) A 「さあ、それは名簿を見んと分からんです」

B 「どうして」

A 「うちは男女合わせて千六百人の会員さん、抱えていますから」

のように、「から」節は「どうして」の答えになれる。従って、以上の
例文においては、「から」が論理的因果関係を表す。

また、同じく論理的因果関係を表す「から」による言いさし表現であ
るが、主節が先行文脈で言われたため省略されたものもある。

9) 楓「お兄ちゃんと会わずに行くの？」

有希「電話も出てくれないし、メールも返事くれないから」

(『こっぱみじん』西田直子)

10) 子田「あっちに乗っちゃ駄目なんですか？」

宏「あっちに乗れるのは普通の人だけだから」

(『トイレのピエタ』松永大司)

これらの例文においては、後続の内容を補えば、それぞれ「電話も出てくれないし、メールも返事くれないから、会わずに行くよ」「あっちに乗れるのは普通の人だけだから、乗っちゃ駄目だよ」というように完全文に復元できる。同じく言表事態と理由を断定する事態めあてのモダリティが含まれているため、段階Bの言いさし表現である。前の倒置の言いさし表現と同じように、「から」節も「どうして」という問いの答えになれる。

9)' 楓「お兄ちゃんと会わずに行くの？」

有希「うん」

楓「どうして」

有希「電話も出てくれないし、メールも返事くれないから」

10)' 子田「あっちに乗っちゃ駄目なんですか？」

宏「だめだよ」

子田「どうして」

宏「あっちに乗れるのは普通の人だけだから」

このように、これらの例文における「から」は論理的因果関係を表しているものと理解できる。話し手は「から」節で理由を説明することで相手の質問に答えているのである。

(2) 段階B2の言いさし表現—主観的因果関係を表す「から」

段階B2では、「から」は同じく因果関係を表すが、主観性が強いと考える。それらの言いさし表現の談話的機能に関しては、于（2001）が指摘している「理由づけ」という名を借用して説明したい。

まず、例文を見てみる。

- 11) 拓児、停めてある錆び付いた自転車にのり、
拓児「いいから行くべ、メシ食わしてやっから」
(『そのみにて光輝く』高田亮)
- 12) とき子「お酒飲みに行かない。私、おごるから」
恵美子「わ。バイトのくせにおっきくでたなあ」
(『海を感じる時』荒井晴彦)

以上の例文においては、「から」節は「どうして」という問いの答えにすれば、不自然な会話になるため、「から」節は前のように〔理由→結論〕のような論理的因果関係を表すものではない。この二つの例文から見ると、「から」節は、前件にある相手に対する動作の促し（「行くべ」「お酒飲みに行かない」）の理由（「メシ食わしてやっから」「おごるから」）を追加して提示しているものである。これらの言いさし表現は構文的形式としては倒置された表現になっているので、前件と後件の位置を交換すると、「メシ食わしてやっから、行くべ」「私、おごるから、お酒飲みに行かない」のようになる。しかし、元の複文に復元した文は意味的にも表現的にも不自然な感じがする。それはなぜかという点、「から」節は、話し手が促しを勧めるために説得力があるだろうと後から追加した理由で、論理性に基づいたものではなく主観的に思いつけたものだからである。元の例文では、相手に対して命令や勧誘といった働きかけがあり、それを相手に納得させるために、自分なりの理由を追加する表現なので、その結果、復元された複文のように、まず理由があって結論がそこから生まれるという論理的因果関係ではなく、「から」節は話し手の主観的因果関係づけを表しているのである。言い換えれば、聞き手に対する働きかけなどを強めるために追加される「から」節は先

行文脈にある事情の成り立ちや働きかけを正当化させるための理由付けをしているもので、論理性よりも話し手の主観に基づく認識を示し、話し手が認知する因果関係の存在、話し手が考える有効な理由付けが根拠にあるのである。これらの例文は言表事態と理由を断定する事態めあてのモダリティが含まれているため、段階Bの言いさし表現に属すべきであるが、「から」従属節は主観的因果関係を表すことができるという性質を持つことで、主節との論理的因果関係性という束縛から解放されたと言える。これらの言いさし表現は主観性を持つ段階B2に属す。このような言いさし表現においては、主節に相当する内容が命令や禁止、勧誘や依頼など、相手に何か働きかけの意味機能を表すものが中心である。

この二つの因果関係を表すタイプの相違点と言えば、それぞれが理由と結論を結び付ける客観的な論理性と主観的關係付けにあるが、主観的な因果関係づけを表す場合は、言いさし表現を論理性に従って完全な複文に復元すると、不自然な表現になったりニュアンスが違った表現になったりしてしまう。それだけ、主観的因果関係を表す「から」節は主節との論理性から離脱することになり、ある程度独立性が高い文的性質を持つようになると言えよう。「から」が主観的理由を表すことができるという性質は、従属節と主節によって形成される論理的因果関係から「から」を解放し—白川が言う「理由にならない」用法はその意味で「論理的な理由にならない」と言いなおすべきであるが—、話し手の主観的な理由付けを表すことだと言えるのではないかと思う。従って、結果的に構文的にも主節の束縛からも離脱することができるようになった「から」節は、話し手の主観性を獲得することによって更に独立性の高い表現となり、「から」による言いさし文への転換の基礎を築き上げたのである。

以上挙げた例文を見て分かるように、主節がなければ、「から」節は

何について因果関係を表しているのか分からなくなる。例えば、「父親の笑顔なんて見たことないから」「電話も出てくれないし、メールも返事くれないから」だけでは、「言表事態+事態めあてのモダリティ」の構成で、言語化されていない結論に対する新情報の説明である。しかし、どの結論に対する説明なのかが不明になる。聞き手は話を理解するために、主節の内容に依存しなければならない。つまり、結論である主節の部分が補われてはじめて、「から」節は発話・伝達のモダリティを備えるようになり、それで完全文になるのである。従って、以上の「から」による言いさし表現は発話・伝達のモダリティが含まれていないため、段階Cにならないのである。

また、B1とB2の相違であるが、文末に用いられる「から」の意味機能は論理的な因果関係を表し、補われる主節と論理的な因果関係表現に復元できれば、接続助詞「から」の本来の用法であり、ただ構文的に主節が倒置されたり、省略されたりすることで言いさし表現になったと理解する。それに対して、話し手の主観認識によって理由づけた段階B2の言いさし表現は、主節との論理的因果関係から解放されているが、依然として認識にある主節内容—聞き手に対する働きかけ—を理由付けたもので、まだ【従属節—主節】構造を維持しているものと考えられる。

以上述べたことをまとめると、上記の例文は言表態度と事態めあてのモダリティのみが現れるので、段階Bの言いさし表現であり、不完全な文である。その中で、「から」の語彙的特徴により、段階B1は論理的因果関係を表し、段階B2は主観的因果関係を表す、というように分けられている。段階B2は「から」による言いさし表現が段階Bから段階Cへと転換する可能性を作っている。

5.2 「から」による段階Cの言いさし文

段階Cの言いさし文は独立文としての文性質を持つ完全文になる。段階Cの言いさし文は完全文と同等の性質を持っているので、構文の角度から言えば、そのような文には総ての言表態度が現れている。それに合わせて、文構造も【従属節（接続助詞も含め）。】という形が主流となるのである。段階Bとの区別は、段階Bに基づき、段階B2を転換の架け橋とし、更に依存性が弱くなり、発話・伝達のモダリティが現れることである。以下は、これらの言いさし文はどのような語用論的機能を持つのか、なぜ完全文として成立できるようになったのか、それらの用法において接続助詞はどのような機能を果たしているのか、本来の用法とどのような関連性があるのかについて詳しく論じていく。

(1) 段階C1の言いさし文—働きかけを表す「から」

結論から言えば、段階C1の言いさし文は、総ての言表態度が現れ、完全文と同質性を持つものである。この段階にある言いさし文は、主観的因果関係を表す「から」節が意味的にも構文的にも本来の主節から離脱し、発話・伝達のモダリティがはじめて現れ、依存性の弱い表現である。以下は語用論的角度から機能別に分析を行っていく。

段階C1の言いさし文は、相手に対して働きかけるものが中心である。談話的機能と言えば、話し手は相手に認識されていない背景知識や情報などを提示することで相手の行動を促す用法である。

13) 一子「あ、お、起きました……？あの……これ。風邪に効くから……」

一子は擦りおろしリングを持っていく。

(『百円の恋』 足立紳)

14) 薫「ごめんごめん。ほら良太、二人にお礼を言って」

良太「えー、何で？」

薫「何でもいいから」

(『岸辺の旅』 宇治田隆史・黒沢清)

この二つの例文は、相手に対して働きかけを表す後件を省略することによって、接続助詞が代わりに総てのモダリティを担うようになったのである。この二つの例文においては、言語化されていない結論の部分は実際は「促し」の内容で、「促し」のような働きかけの発話・伝達のモダリティが「から」による言いさし文に含まれている。以上の例文においては、「から」による言いさし文は「風邪に効く」「何でもいい」という情報を伝えるだけでなく、「食べてください」「お礼を言って」というように相手に対する促しも表している。つまり、「から」による言いさし文には、事態めあてのモダリティ（理由の断定）がある上に、発話・伝達のモダリティ（相手に対する働きかけ）もあるのである。これで、これらの言いさし文は完全文と同質性を有するものと見なすことができる。また、「から」がモダリティを担っていることは下記の条件によって証明される。

まず、「から」を取り除くと、「風邪に効く」「何でもいい」のようになり、言表事態の内容は変わらないが、断定の事態めあてのモダリティだけになり、相手に対する働きかけの発話・伝達のモダリティがなくなってしまう。それは、「から」を付けることによって働きかけの発話・伝達のモダリティが現れることの証拠とも言える。また、以上の例文に対して後続の内容を想像して補うテストをすれば、両者の相違が分かることである。例えば、「風邪に効くから、食べてください」や「何でもいいから、お礼を言って」のように後続の内容を補ってみる。そうした

ら、理由から結果を導く「から」の本来の用法になってしまい、「から」がつくことによって生じる働きかけの意味機能がなくなり、そして、発話・伝達の実効性もなくなってしまう。これも、「から」には、発話・伝達の実効性が含まれるようになった証拠である。

つまり、「から」がつく言いさし文には、総ての言表態度が現れ、「から」の用法は終助詞化されつつあるものになる用法である。「から」がつけられることで、それらの言いさし文は完全文と同質性を持つようになっていく。

まとめてみると、段階C1の言いさし文には言表態度の総てが現れることになり、主に相手への働きかけの発話・伝達の実効性を表すものとなる。そこに用いられる「から」の用法は終助詞化されつつある用法であり、言表態度を表す役割を担う。

(2) 段階C2の言いさし文—述べ立てと表出を表す「から」

段階C2の言いさし文は、接続助詞の事態めあての実効性を表す機能が弱体化され、発話・伝達の実効性を表す機能が強化されるものである。段階C2においては、述べ立てと表出の実効性を表すものが中心である。語用論的機能をタイプごとに分類すれば、「情報の伝達」「意志の告知」「不満」という三つの種類に分けることができる。以下では、各種について説明していく。

A) 「情報の伝達」

「情報の伝達」というのは、相手が認識していない情報を伝達することを目的とする用法である。

15) 一子「あ、あの……もし良かったら……い、いてもいいですから。
ここ……」

祐二「……」

一子「い、嫌だったら……鍵はポストに……。じゃ……。あの、
それであの人は……本当に違いますから」

(『百円の恋』 足立紳)

16) 徹「……父親の鬱、どう？」

美優「薬、飲んでるから」

徹「うん……」

(『さよなら歌舞伎町』 荒井晴彦・中野太)

この二つの例文の共通点は話し手が相手に新情報を伝達しているところである。例文15)では、「あの人が違います」という相手が知らない情報を伝えている。例文16)では、聞き手の問いに対して「薬、飲んでる」と説明している。これらの言いさし文は事実を断定する事態めあてのモダリティを表すと同時に、それを相手に伝えるという述べ立ての発話・伝達のモダリティも含まれているのである。

B) 「意志の告知」

「意志の告知」というのは、自分の意志を表出し、相手に伝達するということを指している。

17) ミキ「私……健介のことが好きなの」

楓「えっ!？」

ミキ「健介が幸せならって思ってた……だから楓が何となく付き

合ってるの、ホントは、ちょっと許せなくて」
楓「……ごめん、私、全然気付かなくて」
ミキ「私、健介に告白するから」

(『こっばみじん』西田直子)

18) 宏「じゃあ今日はいいや。風で中止ってことで」
星田「……すみません」
宏「ゴンドラ片付けてくるから」

(『トイレのピエタ』松永大司)

これらの例文においては、それぞれ「私、健介に告白する」「ゴンドラ片付けてくる」というように話し手が自分の意志を告知している。以上の言いさし文には、断定の事態めあてのモダリティが含まれ、表出の発話・伝達のモダリティも含まれる。

C) 「不満」

「不満」の言いさし文は、主に聞き手に対して不満の気持ちを表出するものである。

19) 寛子「あ、お帰り。丁度よかった、コーヒーお代わりお願い」
楓「……人使い荒いんだから」

(『こっばみじん』西田直子)

20) 野間「自分もたまたまに店長に言ってたんすよ。汚いから何とかしようって。でもあの人、あとで、あとで……いつもそうだから」

(『百円の恋』足立紳)

この二つの例文においては、それぞれ「人使い荒い」「いつもそうだ」というように話し手が相手に対して非難や不満の気持ちを表している。以上の例文には断定の事態めあてのモダリティが含まれると同時に、理由ありの非難・不満の気持ちを表出する発話・伝達のモダリティも含まれる。

以上をもって、段階C2の言いさし文にも総ての言表態度が含まれていると分かった。それは、「から」がつくことによって生まれたからだと考えられる。以上の例文では、「から」を取り除くと、言表事態の部分が変わらないので、「から」の機能は言表態度のカテゴリーに属すものと分かる。次に、「から」を使わないと、述べ立てや表出の発話・伝達のモダリティもなくなってしまうので、「から」が発話・伝達のモダリティを担っていると分析される。このような「から」の用法は、命題内容に発話・伝達のモダリティを付け加える終助詞に非常に似ているので、終助詞化された用法と見なしてよからう。このように、発話・伝達のモダリティを担う「から」をつけることによって、段階C2の言いさし文は完全文と同質性を持つようになったのである。

まとめてみると、段階Cでは、「から」による言いさし文が総ての言表態度を表している。「から」が使われることで、段階Cの言いさし文は完全文と同等になり、働きかけ、述べ立てと表出の発話・伝達のモダリティを表すようになっていく。段階C、とりわけC1においては、「から」は既に終助詞的な性質を持つようになったが、まるっきり終助詞と同じというまでには至っていない。それは、高橋（1993：21）が指摘しているように、「こうした文でも、それぞれの接続助辞でむすばれる従属節の主節に対する関係の意味の性質が、基本的には、のこってい」る

からである。ここでは敢えて終助詞的用法と呼ばず、終助詞化された用法と呼んだほうが妥当であろう。ここで終助詞の代わりに「から」が使われる理由としては、まず、終助詞には以上のようなモダリティを表すものがなく、発話・伝達のモダリティの空きを埋め合わせていること、また、話し手が「から」を使うことで「から」の言いさし文の内容を先行文脈と【理由—結論】という形で結び付けようとする意図を仄めかしているからだと考えられる。段階C2と段階C1との区別は、段階C2では、表された発話・伝達のモダリティが原因で、そのような因果関係を表す事態めあてのモダリティが更に弱化され、後続の内容もより一層想定しにくくなるというところにある。

6. まとめ

ここまで、「から」による言いさし表現を考察してきた。段階Bの言いさし表現は不完全文であり、言表事態と事態めあてのモダリティだけが現れるもので、主節に依存して成立している。「から」の用法は主節との因果関係—論理的であろうと主観的であろうと—を内包しているもので、基本的に本来的用法である。その中に、段階B1に用いられる「から」は論理的因果関係を表すもので、従属節と主節との意味関係がより緊密になっている。それに対して、段階B2に用いられる「から」は、話し手が主観的に認定する因果関係を表すもので、従属節と主節の意味関係には論理性が欠けている。そのため、段階B2の「から」節は意味的にも、構文的にも、主節の束縛から離脱する可能性が現れてきており、それで、「から」による言いさし表現が完全文に転換していく基盤を築き上げておいたのである。

段階Cの言いさし文は、「から」が因果関係を表す理由付けという意味機能から離脱して発話・伝達のモダリティを示す完全文になり、言表

事態と総ての言表態度が現れている。その中に、段階C1は「促し」の語用論的機能があり、働きかけのモダリティを表す。段階C2は「新情報の提示」「意志の告知」「不満」といったような語用論的機能を持ち、述べ立てと表出のモダリティを表す。段階C2の「から」の用法は、因果関係を表す本来の性質がまだ残っているものの、非常に弱まっていて、もっぱら発話・伝達のモダリティを担うものとなり、終助詞化された用法になっていると見なすことができよう。

上記の分析をもとにして、「から」を含む表現を機能転換プロセス的に図示してみると、以下ようになる。

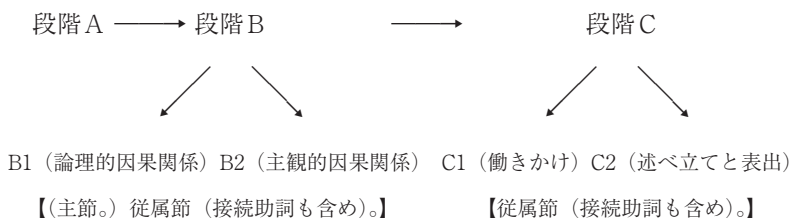


図1

このような段階性と機能転換プロセスを持つ接続助詞は「から」だけではない。これからも、このような考察方法で他の接続助詞による言いさし表現の段階性及びその接続助詞の機能連続性を分析し、接続助詞による言いさし表現を体系化してみたい。

参考文献

庵功雄. 2001. 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』, スリー
エーネットワーク

- 石黒圭. 2014. 「講義の談話における「が」「けれども」の用法」, 『一橋大学国際教育センター紀要』, 5 : 3-15
- 于日平. 2001. 「关于“から”的功能转变—表示理由的接续助词用法和表示说话人语气的终助词用法—」, 『日语学习与研究』, 2 : 5-10
- 金瑋婷. 2018. 「接续助詞による言いさし表現の分類について」, 『言語と文化』, 30 : 1-30
- 国立国語研究所. 1960. 『話しことばの文型（1）—対話資料による研究—』, 秀英出版
- 白川博之. 1991. 「「カラ」で言いさす文」, 『広島大学教育学部紀要』, 2-39 : 249-255
- 白川博之. 1996. 「「ケド」で言い終わる文」, 『広島大学日本語教育学科紀要』, 6 : 9-17
- 白川博之. 2009. 『「言いさし文」の研究』, くろしお出版
- 白川博之. 2015. 「「言いさし文」の文法」, 『日本語学』（特集 ことばを言いさすとき）, 34-7 : 2-13
- 高橋太郎. 1993. 「省略によってできた述語形式」, 『日本語学』, 12-9 : 18-26
- 永田良太. 2001. 「接续助詞ケドによる言いさし表現の談話展開機能」, 『社会言語科学』, 3-2 : 17-26
- 仁田義雄. 1997. 『日本語文法研究序説 一日本語の記述文法を目指して』, くろしお出版
- 朴仙花. 2008. 「現代日本語における接续助詞で終わる言いさし表現について—「けど」「から」を中心に—」, 『言葉と文化』, 9 : 253-270
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 改訂版』, くろしお出版
- 南不二男. 1993. 『現代日本語文法の輪郭』, 大修館書店
- 横森大輔. 2006. 「接续助詞の文末用法をもたらず要因—相互行為にお

る参加者の認知の観点から」, 『言語科学論集』, 12 : 57-76
横森大輔. 2011. 「相互行為の資源としての複文構文の意味—カラ節とケ
ド節の言いさし現象の考察から—」, 国立国語研究所「複文構文
の意味の研究」ワークショップ

用例出典⁵

足立紳 (2014) 『百円の恋』／西田直子 (2014) 『こっぴみじん』／鶴橋
康夫 (2016) 『後妻業の女』／池上純哉 (2016) 『日本で一番悪い
奴ら』／宮崎大・大森立嗣 (2016) 『セトウツミ』／高田亮 (2014)
『そのみにて光輝く』／杉原憲明 (2015) 『ディアーディアー』／
松永大司 (2015) 『トイレのピエタ』／宇治田隆史・黒沢清 (2015)
『岸辺の旅』／荒井晴彦 (2014) 『海を感じる時』／荒井晴彦・中
野太 (2015) 『さよなら歌舞伎町』／荒井晴彦 (2015) 『この国の
空』

⁵ シナリオ作家協会編の年間代表シナリオ集を資料として使うことにする。シナリオ作家協会編の年間代表シナリオ集というのは、日本シナリオ作家協会が昭和27年から毎年、その前年を代表する優れた邦画のシナリオを収録する「年鑑代表シナリオ集」を編纂しているものである。